

## 14,000km の門出

作：鳴人

「オレンジ色は、雪と氷で真っ白な南極でも見つけやすいんだよ」  
南極への 14,000km におよぶ航海を、何度も成功させた偉大な船、南極観測船ふじ。そのオレンジ色の船体を見つめながら、母の言葉を思い出す。

明日、私は南極に出発する。  
白い大きな帆船のようなポートタワー、海を渡る橋、水族館に向かう家族連れ、南極を生き抜いたタロとジロ。ガーデン埠頭から見える風景ともお別れだ。名古屋で生まれた私は、まだ南極を知らない。

南極行きのメンバーに選ばれるまでの日々は、苦難の連続だった。ライバルたちとしのぎを削る日々に、何度も挫けそうになった。それでも乗り越えられたのは、水泳で身につけた体力のおかげだったと思う。泳ぐことは今でも大好きだ。水中なら私は無敵。空を飛ぶように自由になれる。

そして運命の日、メンバーに選ばれた私に、母は「あなたなら大丈夫」と目に涙を浮かべ、応援してくれた。

「そろそろ行こうか」と急かす案内係に促されて、私は用意された車に向う。乗り込むとラジオからニュースが聞こえてきた。

「明日、南極観測隊が日本から出発します。乗組員たちは 2 ヶ月かけて南極を目指します」

さあ、いよいよ出発だ。

「また、今回初の試みとして、名古屋港水族館で生まれたアデリーペンギンの里帰りが計画されています」

私は、ブルルッと短い翼を震わせてから、ペタペタと短い足でケージに乗り込んだ。



## 母なるペンギン

作：文中 繡

「おかーさん、ペンギン！」

南極観測船『ふじ』を下り、ポートブリッジを半ばまで渡ったところで息子(5)が上を指差す。つられて上を向いた私の帽子を海風がさらっていった。

「ペンギン？」

「うん、あっちいった」

息子の視線のさらに先に水族館が見える。ペンギンは橋の上を飛ばない。たぶんカモメか何かだろう。

「おかーさん、ペンギン！」

幼稚園の遠足で毎年来ている息子は私よりずっと水族館に詳しい。順路をこっちこっちと引っ張られ、ペンギン大水槽に最短で急行した。ガラスの向こうでペンギンたちが冰山に暮らす。陸では歩くのも大儀そうなのに、水辺から滑り込むと完璧な流線型で波をとらえて海中を飛ぶ。ペンギンは確かに鳥だ。

「おかーさん、ペンギン！」

出口前のミュージアムショップ、あらゆる海の生き物グッズが子どもを魅了するスポット。夢の世界に一瞬圧倒された息子が一点に吸い寄せられる。

「これ！」

「ん？ペンギン？」

帽子を飛ばされたのは私なのに、なぜか息子の帽子を買っている。しかもあれだけペンギンフィーバーしておいて、彼が嬉しそうにかぶっているのはシャチの帽子だった。

「おかーさん、ペンギン！」

水族館を出たところに大小のペンギン像がいた。

「おかーさんペンギンと、あかちゃんペンギン？」

「んー、これは世界最大と最小のペンギンだって」

銘板の説明から顔を上げると、私より背が高い古代ペンギン・アントロポロニスと目が合う、はずだった。

「ぼうしかぶってたら、まえみえないよねえ」

世界史上最大のペンギンが見覚えのある帽子をかぶっている。ちょっと失礼して手に取ると、目印の缶バッジも確かに私のものだった。

帽子が戻った帰り道、ずっと気になっていたことを息子に伝える。

「あのね、おかーさんは、ペンギンではないよ」



「パパ、レゴランドに行きたいな。ねえ、水泳の練習も頑張るからさ」  
「うーん、そうだな。お前は最近よく頑張っているし、ご褒美に連れて行こう」  
「わーい、やったあ」  
日曜日の夜。明日はパパのお仕事がお休みです。  
親子は、そーっと地下の隠し扉を開けて、広い港に出ました。

彼らは、名古屋港水族館のイルカの親子。  
今夜は秘密のお出かけです。

「わぁ大きなお船！ ヘリコプターもあるよ」  
「本当だ。よくできているなあ。本物みたいだ」  
「いつか、本物を見てみたいよ」  
いつもプールから見上げている乗り物は、ぼうやにもパパにとっても憧れです。  
「見てみて、ブロックがいっぱい。カラフルだね」  
「四角いブロックを、崩れないように積んでごらん」  
「おととと。難しいね。でも楽しい」  
ぼうやはおっかなびっくり、小さめのブロックで遊びます。  
「ねえ、こっちには変わった形のブロックがあるね」  
「それは、アルファベットだよ」  
「へえパパ、すごーい！ なんて読むのかな？」  
ぼうやに褒められてパパも嬉しそう。

「沢山遊んだね。そろそろ帰ろうか」  
遊んだブロックを綺麗に片付けて。  
朝が来る前に、水族館のプールに戻ります。  
ぼうやは満足そうな笑顔を浮かべて夢の中へ。その様子を見てパパもニコリ。親子は寄り添って眠りました。

さて、朝が来ました。  
なんだか港が騒がしいようです。  
「おい、夜のうちに小さいコンテナが整理されているぞ」  
作業員のおじさんたちはビックリ。

実は  
親子が遊んだのはレゴランドではなく、名古屋港だったのです。  
彼らが見た船は南極観測船ふじと、甲板に搭載されたヘリコプター。  
ぼうやが積んだのは、港のコンテナだったのです。

でも、良いんです。  
ぼうやにとっては、夢の遊園地そのものだったのですから。

あっ！ 一つだけ。  
「N, A, G, O, Y, A」のアルファベット。  
ぼうやは「G」の文字だけ、斜めにして戻してしまいました。

ほら、やってきたお客さんたちが、驚いて見えていますよ。



九月一日

作：赤味噌

ピピッ。ピピッ。交通系 IC カードをタッチした、ただ無機質な音が鳴り響いている。朝の時間帯ということもあって栄駅は混んでいた。

九月一日。一年で一番自分を見失う日。私は重い足取りで券売機に向かった。そして券売機を前にし、切符を買おうと意気込むも、指先が震えて動かなくなった。

いきたくない。

「チッ。早くしろよ。お気楽な学生と違って急いでるんだよ」

唐突な中年男性の舌打ちに驚き、慌てて切符を買ってポケットにしまい、その場を離れた。

怖い、みんな怖い。だから、だから仕方がないんだ。私はその場でしゃがみこみ、静かに泣いた。

私はみんなみたいな「普通」ではない。みんなみたいになりたかったなあ。

「……あんた」

苦しい気持ちに押しつぶされていた時、女性の声が聞こえた。恐る恐る顔を上げると、そこにはふくよかな体型の中年女性がいた。

「あんた、ちょっとこっちにきな」

状況を理解する前に自販機に連行された。

「あんた、逝くなよ。生きろよ」

「……っ！」

なんでおばさんが私の考えを知っているのか。それを尋ねたかったが声が出なかった。

おばさんは交通系 IC カードを取り出し、自販機にかざした。

ピピッ。あの無機質な音が聞こえた後、おばさんはしゃがんで缶を取った。そして、おばさんはその缶と小さな紙を私の手に押し付けた。

「踏ん張りなさいよ。……応援してる」

そう言っておばさんは去っていった。

私は自身の手を見た。そこには、おばさんがくれたミルクティーと名刺があった。静かに缶をぎゅっと握ると、缶の温かさがじんわりと伝わってきた。

踏ん張りなさい、か。私はポケットから切符を取り出し、ぐしゃっと丸めた。そして、缶をぎゅっと握り、改札に向かって歩き出した。

スマホから定期券を取り出し、改札にかざした。

ピピッ。あの無機質な音が聞こえた。不思議と、嫌な感じはしなかった。



「ねえ、ママ、黄色が気になる」

先ほど見かけた可愛い雑貨店に立ち寄らせてもらえず、全身で不満をあらわにし、地下街を桜通線の改札口へ向けて足取り重くしょげていた紬がふいに話しかけてきた。

「黄色は東山線だから、乗り換えしないと帰れんよ。たくさん歩かんといかんよ？」

「でも、気になる……」

いつ頃からか、紬は『気になる』と言う言葉をよく使うようになった。何かをしたいと言ってもダメと言われる事が多く、十歳そこそこの子どもが経験則として身につけてしまったのかもしれない。

また、何々をしたいと言われれば簡単に却下出来るのに、『気になる』には無下にあしらう事が出来ない不思議な力があると真由美は感じていた。

今日は紬の大好きなアニメキャラクターを題材としたイベントが名古屋駅で期間限定開催されており、ここまでやって来た。

販売飲食メニュー一品毎に限定缶バッジがランダムでもらえる為、各々ドリンクと軽食、スイーツまで注文して紬の食べきれない分も真由美が引き受け満腹の上、地下街のあちらこちらに紬が興味を示し、歩き疲れてもいた。

黄色いフロアシートサインを平行棒のように歩きながら紬が真由美の腕を引っ張って言う。

「東山線も、ちょっと乗ってみたい」

いいから桜通線で帰るよと言いかげ、黄色と赤の道しるべが分かれて行く床を見つめながら真由美は少し深めに息を吸い込んだ。

「じゃあ、東山線に乗ろうか」

「いいの?!」

瞳をキラキラさせて紬は声を弾ませた。

「黄色でも赤でも、水色でも紫でもピンクでも、どれに乗ってもママは家に帰る方法を知っとるんだよ」

「なんで?! ママ、すごい!」

そう、紬にはまだまだ知らないたくさんの選択肢があって、どれを選ぶのかも紬の自由なのだ。親は線路ではなく標識でいい、どの道に行くのかは子が自分で考えるだろう。

黄色い平行棒を渡り終え、軽い足取りで東山線改札口を通る紬の manaca も、ピヨピヨと嬉しそうに鳴いた。

